

*** 今日の健康（6月）***

＜ 百日咳の流行 2025 ＞

子どもを中心に感染し、激しいせきが続く「百日咳」の流行が続いています。5月25日までの1週間に全国の医療機関から報告された患者数は、前の週より360人余り多い2660人と、過去最も多くなりました。

百日咳は激しいせきが続く細菌性の感染症で、特に生後6か月以下の乳児が感染すると、重症化して死亡するおそれもあります。

国立健康危機管理研究機構によると、5月25日までの1週間に全国の医療機関から報告された患者数は、前の週から361人多い2660人で、今の方法で記録を取り始めた2018年以降最も多くなりました。都道府県別では新潟県が148人と最も多く、次いで兵庫県が139人、東京都が128人、福岡県が120人、埼玉県が113人などとなっています。また、今年の累計の患者数は2万2351人となり、昨年1年間の5倍以上となっています。



症状：軽い風邪のような症状（咳、鼻水など）から始まり、徐々に咳が強くなってきます。特徴的なのは、「コンコン、ヒュー」と聞こえる咳発作を繰り返し、特に夜間に咳がひどくなり、乳児では呼吸困難や嘔吐を引き起こすこともあります。

合併症：百日咳は咳が長く続くだけではなく、乳幼児では、肺炎（20%）や脳症（0.5%）を合併し危篤状態に陥ることもあります。年長児や成人では、概ね軽症で、あまり大きな合併症はありませんが、咳が長く続くことによって不眠や日常生活に支障をきたす場合があります。

感染経路：百日咳はその名前の通り、長期間「せき」が続く感染症です。百日咳菌によっておこり、菌を含んだ患者の鼻水やだ液が咳やくしゃみ等で飛び散り、それを周囲の人が吸い込んで感染する「飛沫感染」と、手を介した「接触感染」によって感染が広がります。咳症状が出始めた発症早期から、咳が出ている間は感染力が強いです。

治療：抗菌薬治療を受けずとも大抵は時間経過とともに症状は軽快し自然に治癒することが期待できます。特に大人の場合は軽症で済み特徴的な咳発作がないままに回復期に移行することもあります。一方で、乳児では重症化する危険性が高く、ときに命に関わります。

予防：日本では百日咳の予防として乳幼児期に5種混合ワクチン（百日咳・ジフテリア・破傷風・不活化ポリオ・Hib）または4種混合ワクチン（百日咳・ジフテリア・破傷風・不活化ポリオ）を接種しています。4-12年で免疫力は低下するため、学童期や成人でも追加接種が推奨されています。3種混合ワクチン（ジフテリア・百日咳・破傷風）は、成人向けの任意接種として利用できます。百日咳ワクチンを接種していても、罹患する可能性はありますが、ワクチンを接種することで発症リスクを80%～85%程度減らすことができ重症化を防ぐ効果も期待できます。